

国境線を超える未来へ

北九州市立大学 4 年 中原 亮

「この丘から見える国境線は一体何のために存在するのか。」

この瞬間から、私の国際協力への道は開かれたー

2015年春。

私は1年間の交換留学プログラムを利用しアメリカ・コロラド州の小さな町で留学生活を送っていた。そんなと突然アメリカ人の友人から誘われたのだった。

「春休みに、私と一緒にメキシコへ行かない？」

話を聞いてみると、彼は友人たちと毎年春休みにメキシコのある街へ行き、そこにある小さな小学校を建てるため1週間のボランティアを行っているというのだ。昔から旅好きを公言している私は、せっかくの春休みに異国の地に行つて面白いことを経験したい、というただそれだけの動機により二つ返事で快諾した。

そしてメキシコ出発当日。10時間近く車を走らせやっと国境の辺りまで着いた。そこには入国の許可を待つ長い車の列。しばらく待っていよいよ入国というところになると緊張感が漂う。しかしもちろん何か起こるわけもなく、あっさりとメキシコへ入つていった。我々が目指す小学校は国境からそう遠くないところにある大きな街の外れに存在した。到着したその翌日からボランティアは始まる。私たちの仕事は主にペンキ塗り。建物自体は既に完成しているが、まだ塗装が十分ではなかった。授業を受ける子どもたちも大勢いた。話を聞くと、こちらの小学校は学費が払えず公立の小学校に通えない子どもたちのために親たちが協力し合つて運営している小学校なのだそう。しかし経済的には困っているのかもしれないが、子どもたちの笑顔は私が出会ってきたどの子どもたちより輝いていた。子どもたちと接することが好きな私は、彼らとできるだけ多くの時間を過ごし、言葉は通じずとも彼らの温かい笑顔に心を癒された。

そんなある日、現地で出会つた知り合いから山登りに誘われ、出かけることにした。そこは山というよりも小高い丘という方がふさわしい場所であつた。30分も登つたところで頂上付近まで達した。頂上からの景色が開けてきたところで、私は思いがけず絶句した。

「これは、、、」

そこには果てしなく東西に延びる国境線が広がっていたのだった。そして私を最も驚かせたのは、その国境を境に広がるメキシコとアメリカの圧倒的な生活感の違いであった。アメリカ側には高層建築や大学が立ち並んでいた。一方でメキシコ側には、ただただ乾いた土地とそこに散在する小さな民家があるのみであった。実際にアメリカからメキシコに入り、多くの違いを感じた。メキシコでは上下水道の整備も十分でなく断水・漏水は日常事であった。ゴミはあちらこちらに投げ捨てられ道を歩くだけで腐敗臭のようなおいがした。子どもたちは元気もやる気もみなぎっているにも関わらず、様々な理由によりやむなく多くが進学をあきらめざるを得ない状況。それがこのたった一本の国境線で変わる。たった一本の国境線を境に、その線のどちら側に生まれたかというただそれだけの事実によって、その後の人生が大きく変わってしまう。我々はこうしたことをやすやすと認めてよいのか？ただ生まれた場所が異なるというだけでこんなに大きな差が許されて構わないのか？私は生まれて初めてやり場のない哀しさを覚えた。そして、茫然と立ち尽くした。

しかし、その瞬間、私はもう1つあることを心に誓ったのである。

「私は生まれる場所に関わらず子どもたちが自分の意志で自分の将来を決めることのできる社会を作りたい。」

その瞬間から今、1年半が経過した。私は今、学業と両立しながらNGO職員として働き始めた。もちろんあの時と想いは変わらない。今は県内の学生たちに少しでも国際協力に関心を持ってもらおうとイベントや勉強会を開催したり相談にのったりしている。大変なことはもちろんあるが、決してこの活動を辞めようと思ったことはない。なぜなら、メキシコで出会った子どもたちの笑顔が今でも私の心の中で輝き続けているから。(1,596字)